

# 徳島医学校一等教諭となった医学士千原春甫の事績 — 医学生が直面した明治初期の医学教育改革 —

梶谷光弘

明治12年（1879）4月22日、東京大学医学部では明治天皇の御臨幸の下、初めて開業式が挙行された。この時、医学部総理池田謙斎は祝辞の中で次のように述べた。

本邦医学ハ遠ク上代ニ起リ、中古信ヲ外域ニ通セシヨリ、専ラ漢土ノ方法ヲ取レリ…安政年間、幕府和蘭ノ医師ヲ延キ生徒ヲ教授セシメシヨリ、翹テ医学ニ科目アルコトヲ知り、次テ大政維新ノ初、東北事アルニ際シ軍陣病院ヲ設ケ、英人ヲ徴シ専ラ兵士ノ創痍ヲ療セシム。是ニ於テ本邦ノ医学大ニ面目ヲ革メリ…明治四年、教師ヲ独国ニ聘シ大ニ教則ヲ釐正シ、遂ニ歩ヲ高尚ノ域ニ進メ、今日ノ旺盛ニ臻ルヲ得タリ<sup>①</sup>

この「安政年間、幕府和蘭ノ医師」とは、安政4年（1857）、オランダの第二次海軍教育班の軍医として長崎へやってきたポンペ（Pompe van Meerdervoort）である。また、「軍陣病院ヲ設ケ」た際に徴した「英人」とは、文久2年（1862）に来日し、慶応4年（1868）から始まった戊辰戦争中、野戦病院で活躍したイギリス人ウィリアム・ウィリス（William Willis）である。そして、「明治四年、教師ヲ独国ニ聘シ」て来日したドイツ人教師こそ、プロシアの陸軍軍医ミュルレル（Benjamin Carl Leopold Müller）と海軍軍医ホフマン（Theodor Eduard Hoffmann）である。

池田が「高尚ノ域」と表明した背景には、この年の7月、前年11月に全学科を終えた18名へ医学士免許が授与され、ミュルレルの方針に基づいて初めて海外留学生の選考が行われようとしていたからである。

医学分野でのこうした動きは、他の分野でもほぼ同様であった。その結果、わが国へ招聘されたお雇

い外国人の出身国をみると、オランダ、ドイツ、アメリカ、フランス、イギリス、イタリアなどまちまちであり、その数は、明治7年（1874）の524名をピークとして、それまで増加し、その後は少しずつ減少していった<sup>②</sup>。

こうして、西洋諸国が1～2世紀を費やして成し遂げた近代化を一気に実行しようとした新政府は、旧藩の都合主義と列強の外交的圧力に翻弄されながら<sup>③</sup>、「智識ヲ世界ニ求メ、大ニ皇基ヲ振起」（五か条の御誓文）しようとしたのである。

一方、松江藩は、廃藩置県によって松江県、明治4年（1871）には島根県となったが、その後も県域がたびたび変化し、現在のような枠組みが確定したのは明治14年（1881）のことであった。

この間、これから医師をめざす若者はどのような道を模索し、その後、西洋医として活躍したのだろうか。

今回、安政5年（1858）に生まれ、明治16年（1883）5月に東京大学医学部を卒業し、徳島医学校に赴任した千原春甫<sup>④</sup>の事績を辿りながら、当時の医学生の立場から、わが国や島根県が進めていた医学教育、医師養成の施策を考察する。

なお、陰暦の明治5年12月3日は、陽暦では明治6年（1873）1月1日となるが、それ以前は特記しない限り陰暦のままの年月日を記載する。

## 1. 明治政府による二つの医学振興改革

### （1）大学におけるドイツ医学採用

わが国において近代的医事衛生制度が動き出したのは、19世紀半ば、痘瘡、腸チフス、赤痢、コレラなどの感染症や伝染病が流行した際、それまでの漢方医学、漢方医では全く無力だったことによる。嘉

永2年(1849)の長崎での種痘実施、安政4年のボンペの来日、続いて長崎での医学伝習所、養生所、精得館の設置、江戸での種痘所、西洋医学所、医学所の設置など、幕府はオランダ人を介した西洋医学受容に向けて動き出した。そして、慶応4年1月から始まった戊辰戦争では、野戦病院で活躍したウィリスによって、漢方医の非力さと洋方医の優秀さが際立った。

2月になり、典薬少允高階経徳は父経由と連名で「西洋医学御採用方」の建白を行った。すると新政府は、3月7日付けの太政官布告によって「西洋医学之儀是迄被止置候得共自今其所長ニ於テハ御採用可有之被出候事」とし、これまで皇漢の医方を用いていた宮中の典薬寮医師へ蘭方兼習・兼用を許可した<sup>(5)</sup>。

この年(改元して明治)の12月、典薬寮に出仕した岩佐純は、次の3点を書き上げた建白書を提出した。

- ア 洋方の完全なる医学校を創設する
- イ 欧州の制度に倣い、学期を定めて教育する
- ウ 専門の教師を招聘する

その後、岩佐は、佐倉順天堂、長崎養生所で同窓だった相良知安を推薦し、明治2年(1869)正月22日、両名は医学校取調御用掛を命じられた。これは前年10月27日から学制査定のために学校取調御用掛が任命されていた一環であった<sup>(6)</sup>。

すると、「西洋大学ノ盛ナルモノハ独乙ナリ、英仏ハ害アッテ利ナシ、蘭ハ小国日々ニ衰ルノミ」<sup>(7)</sup>と考えていた相良は、岩佐とともに「皇国医学の独立を図らんとするの要は、当時欧州医学の精髓と称せらるる独逸医学を輸入し、我が国医学の振興を図る」<sup>(8)</sup>ことを主張した。

これに対して、ウィリスとも親交があった大学別当の山内容堂らは反対し、政府内で激しい対立があった。そこで、政府の顧問だったオランダ人フルベッキとも協議し、同年8月、ドイツ医学を主流とする方針が決定した。

これは、医学界における一大改革であった。

その後、その中心的役割を果たしたのが種痘所を

起源とする医学校兼病院であり、明治2年12月に改称した大学東校であった。政府はここを中核として医学教育を推進し、そのためにここへドイツ人教師を次々と招聘した<sup>(9)</sup>。

#### 資料1 医学校兼病院から東京大学医学部(第一次)までの名称変更

医学校兼病院	明治2年(1869)2月～
大学東校	明治2年(1869)12月～
東校	明治4年(1871)7月～
第一大学区医学校	明治5年(1872)8月～
東京医学校	明治7年(1874)5月～
東京大学医学部	明治10年(1877)4月～

(10)

#### (2) 兵部省軍医寮設置の動き

医師の養成に関して、一つ課題があった。それは、わが国の軍事防衛を司る兵部省を中心とした軍医の養成である。

明治2年7月、「二官八省の制」の採用によりそれまでの軍務官は兵部省へと改編された。そして、翌年2月、大坂へ陸軍所と軍事病院を設けた。この軍事病院とは、兵士の体力検査並びに外国人教師の指導による軍陣医学の教育(軍医の教育)を目的とするものであった。

明治3年11月には、そこへ大坂病院に在職していたオランダ商館医ボードインと中典医緒方惟準を兼務させた。

一方、明治3年7月、兵部省はこの軍陣病院を改組して軍医寮を開設することを願い出た。8月には海外留学から帰国した山縣狂介(有朋)が兵部省の兵部少輔に任命され、翌年1月、自ら「兵部省上申」を起草し、わが国の近代的な軍政の創定に向けて改革に乗り出した。そして、3月には自ら勧誘して松本良順を出仕させた。

「大学出仕 兵部省病院御用掛」となった松本は、佐倉藩藩医で順天堂を開業していた佐藤泰然の次男で、オランダ商館医ボンペの助手、そして医学所の3代目頭取として活躍し、幕末期におけるオランダ医学受容の立役者であった。これまで長崎養生所や

江戸の医学所で学んだ多くの医師が、維新後に大学東校、長崎医学校などの医学校で活躍していたため、彼らは皆、松本と何らかのつながりがあった。

松本は大学東校に対して、「冗費冗官で実施上功がない」と酷評し、「一時廃止の上、徹底改組すべき」と提案した。かつて医学所頭取在任中にそこを海陸軍病院に改組した経験をもつ彼は、軍医寮を新政府の下で改めて実現させる考えであった。

この考えに松本の義兄であり、当時、大学東校の大学大博士だった佐藤尚中は、「大学東校は、真の医学をもって生徒を教育する所」と主張し、反対した。

この兵部省軍医寮の問題は、医官の人事も絡んで、わが国における衛生事務を大学（後の文部省）と兵部省のどちらが管轄するかという主導権争いだったが、一方ではドイツ医学かオランダ医学のどちらを主流にするかという、医学行政制度の根幹にかかわる問題も孕んでいた。

しかし、明治4年、政府は、大学東校と軍医寮とは「別派」とし、同7年に文部省が東京、京都、大阪へ出した「医制」においても、海陸軍病院関係の事務は文部省の管理外に置くことを明記した。この方針は、その後、衛生事務の管轄が文部省から内務省へ（明治8年）、さらに厚生省へと変わっても（昭和13年）そのままであった<sup>(11)</sup>。

こうして兵部省からの牽制が強まる中、大学東校は、「真の医学」を具現化していく必要に迫られたのである。

## 2. ドイツ人教師ミュルレルによる医学教育改革

### (1) ドイツ人教師の着任

明治3年（1870）2月14日、政府はドイツ北部連邦公使フォン・ブランツの間で、プロシアから医学教師2名を3年間の契約で雇う約束をした。これには「日本の医者は決して両人の上に立つべからず」、「席は別当（注：文部卿）の次席たるべき事」、「日本到着の後は両人とも日本帝の侍医たるべし」<sup>(12)</sup>との条件があった。

しかし、折からの普仏戦争のため来日が遅れたため、その間、大学東校にはオランダ人ボードイン、フランス人マッセ、デンマーク人シモンズが代わって医学教育を行った<sup>(13)</sup>。

明治4年7月8日に来日したドイツ人教師こそ、ミュルレルとホフマンであった。彼らの身分は、ドイツ公使館付きであった。

彼らの来日は、文部省が設置される10日前であり、初登校した18日は、文部省設置と東校改称の日と重なっていた。

### (2) わが国の伝統的医学教育とドイツ式大学の医学教育のギャップ

大学東校から改称された東校において、着任の演説をドイツ語で行った上等医ミュルレルは、これからドイツの医科大学、殊にドイツの陸軍軍医学校の厳格な教則に準拠して改革を進めることを宣言した<sup>(14)</sup>。

しかし、ミュルレルがそこでみた光景は、想像を絶するものであった。

#### 資料2 ミュルレルがみた東校の現実

われわれに紹介された生徒は、約三百名ほどいた。かれらは、ずらりと並んだいくつかの大部屋に、十人ないし十六人ずつ大きな机を囲み、各自火鉢を抱え、キセルを傍に置き、各自の前に広げられた本を大声で張り上げて読んでいた。大体同じ分野の医学書であったが、読んでいる章はまちまちであり、その上書かれている用語は同じからず、しかもみんなが一斉に発声して周知の東洋的な単調な吟唱法で朗読するので、まるでユダヤ教会へ足をふみ入れたかの如き印象を受けた。<sup>(15)</sup>

わが国において、それまでの伝統的な医学教育が最も重点を置いたのは、先輩の医師に就いて教えを受け、その医師から伝統的な漢方医学と、その家に伝わる独自の処方なり療法なり外科手術などを学ぶることであった。そのうえで医学校に通うことは、それまでの修業に加えて、足りない医学知識を補充する手段にすぎなかった。

そのため、それまでの医学校はもちろん、東校に

も決まった秩序はなく、また系統だった研究プランもなかった。生徒は各自が思い思いに必要なと思う折に必要と考える時間だけ、学校に来て勉強していた<sup>(16)</sup>。

「何人の容赦も許さず」、「旧来の支那流の医学教授法を排斥」し、「理性的の規則ある思索を為す」ドイツ流の医学教育の本質を植え付けようとしていたミュルレルにとって<sup>(17)</sup>、この現実とは雲泥の差があった。

そこで彼は、ヨーロッパ風の週日制を導入して時間割を作り、午前中、ドイツ語か英語で講義を行い、午後は、その講義原稿を補習教師へ渡し、補習教師が午前中の内容を繰り返した。そして、土曜日に試験を行い、1週間ごとに生徒の理解度を確かめた。

そして、授業開始から5か月が経過した明治4年12月末、彼は文部卿大木喬任の同意を得て、およそ300名在籍した学生に試験を実施した。すると、合格者はわずか59名ほどであった。この時、彼は、医学生には医学教育に必要な基礎的な予備知識がまったく欠如していることを知った。その後、諸々の事情により20余名が退学し、彼の任期が切れる明治7年8月頃には、わずか35名が残っていた<sup>(18)</sup>。

こうして、ミュルレルは、少数精鋭主義により1学年ずつ段階的に積み重ねていくことや、試験によって生徒の学力を判断して学級編成を行おうと考えていたと思われるが、彼が提案する事柄はことごとく日本人教師らから反対された。

### (3) ミュルレルの構想

ミュルレルは、当初、大学に入る前の準備学校の教育が7年、大学の研究期間が5年、そのうえで本人の能力と学校の必要を勘案して卒業後、3年間ドイツへ留学させて講師の資格を取らせ、この15年間を通して日本人の教授を作り、外国人の教師に代えることを考えていた<sup>(19)</sup>。

予科7年という年限にも反対が多く、明治4年9月の学則改正では3年となった。

そこで、12月、ミュルレルは2学期制の予科を設置し、当分の間のつなぎとしてシモンズ（ドイツ語、ラテン語）、ワグナー（物理、化学、数学）らを雇

い、そこの授業に当たらせた。

明治5年4月、彼はドイツ人教師に来日の招請状を送り、予科の教師として呼び寄せることに動き出したものの、7月の学則では逆に2年と短くなり、予科における基礎教育についてはなかなか理解が得られなかった。

後年、ミュルレルは当時の様子を振り返り、次のように述べている。

### 資料3 ミュルレルの後日談

われわれが兩人揃ってここへやって来たことは時期尚早だった…。この時期には、われわれのうち一人で十分であり、できれば同時に基礎教育と予備教育の教師を何人か揃えて、まず生徒に系統的に準備教育を施し、校舎と病院を建て、それから2-3年後に本格的な医学校を開くようにすべきだった。<sup>(20)</sup>

明治6年3月からコッヒウスやヒルゲンドルフらが着任し、予科の授業が充実するようになり、ミュルレルの構想は徐々に実現した。

こうして、ミュルレルは、日本人の医学生がドイツ人教師から医学の成果だけを学ぶのではなく、その前に行う予科での基礎知識の修得、本科で行うドイツ医学の修得、その後に行う海外留学までも考慮し、それらを通してドイツ医学の本質を会得させ、医師としての人格形成までも想定していたのである。それは、それまでの伝統的な医学教育を180度転換するものであった。そして、その方法は、いくつもの階段を飛び越えて最上階へ上がらせようとするもので、そのためには、ドイツ語に通じることが第一条件であった。

### (4) ミュルレルの構想への反対と通学生制度の誕生

ミュルレルが構想したドイツ語による授業に、大学東校や東校で中心的な存在だった大教授兼文部大丞佐藤尚中は反対した。

佐藤が明治3年閏10月に定めた「大学東校規定」では、医学を学びたい者は誰でも、いつでも入学できた。そのため、学生の年齢差は大きく、この時初めて制定された「正則生」、「変則生」の規定は、その前年に定められた「医学校規則」へ記載された

「少年ノ輩」と「晩学ノ輩」へ配慮したものであった<sup>(21)</sup>。

しかし、「大学東校規定」はミュルレルによってあとかたもなく変更され、佐藤はミュルレルが着任した翌年の明治5年（1872）8月頃、東校を退いた。

ところが10月、佐藤は、ドイツ語による授業は、漢方医が大部分を占めていた現実を踏まえて「日本の実情に合わない」とし、「正則生」と並行して「変則生」の制度を設けて洋方医の促成を図る必要があると主張した。この「変則生」の特徴は、日本人教師が日本語で授業を行い、修業年限も3年半（後に4年となる）と短く、生徒は自宅から通学し<sup>(22)</sup>、そこでは実地訓練を主とした。

この考えはミュルレルとの契約が切れ、帰国する直前の明治8年5月、東京医学校内に通学生制度を設けたことにより実現をみた。

つまり、わが国の医学教育においてただ一人、全権に近い権限を与えられたミュルレルが在職した明治4年7月から同7年8月までの期間のみが、ドイツ人によるドイツ語による医学教育、医師養成であり、その後はドイツ語と日本語による2本立てで授業が行われたのである。

**資料4 ミュルレルの動向**（ミュルレルの資料に表記された明治4～5年のできごとは陽暦で表記されているが、陰暦に修正する）

年号	西暦	できごと
明治4年	1871	7月8日 ミュルレルらが横浜に到着する。 7月10日～ ミュルレルは、大学東校校長岩佐純、外務卿寺島宗則、右大臣岩倉具視らに面会する。その後、天皇陛下に拝謁する。 7月16日 ミュルレルは、約300名の生徒から最優秀とみられる19名の生徒を選び、基本的な解剖学や生理学の試験を行うことを決める。 7月18日 大学を廃して文部省が設置されたことにより、東校と改称される。（大木喬任が文部卿に任じられる。） 同日 ミュルレルが東校へ初登校する。

		7月20日 ミュルレルが解剖学の講義を行う。約140名が受講したが、授業中、多くの生徒が退席する。 9月24日 文部省は、学制改革のため東校を一時閉鎖とする。（新入生の受け入れを中止。） 9月 規則を改正し、伝統的な医学教育を中止し、ドイツ医学を主流とする。（本科5年、予科3年。本科約40名、予科約60名の定員。予科の3年間と本科2年間にドイツ語を設定。） 12月 2学期制の予科を設置する。シモンズ（ドイツ語、ラテン語）、ワグナー（物理、化学、数学）を予科に雇い入れる。 12月末 ミュルレルは大木喬任の了解を得て学生に試験を行う。59名が合格。 その後、209名が復学する。
明治5年	1872	4月 ミュルレルは、基礎教育充実のためドイツ人教師に来日の招請状を送る。 7月 東校規定及びカリキュラムを定める。（予科2年。学科試験、大試験の実施） 8月 第一大学区医学校と改称される。
明治6年	1873	3月 予科にコッヒウス（数学、理化学）、ヒルゲンドルフ（数学、博物学）、フンク（ドイツ語、ラテン語）が着任する。 7月 デーニッツ（組織学、生理学）が着任する。 秋 南校教師ホルツ（ドイツ語、数学）が着任する。
明治7年	1874	5月7日 東京医学校と改称される。 8月 ミュルレルとの契約が終了する。以後、宮内省のお雇いとして、天皇をはじめ皇室を診察する。

<sup>(23)</sup>

ミュルレルの来日から帰国までの動きをみると、来日2か月後の明治4年9月の規則改正によって、東校はドイツ語による授業となり、学年や学期なども定められ、近代的なドイツ医学教育へと転換したことがわかる。

わが国の医学教育は、この時、新たな大きな第一歩を踏み出したのである。

これは、どんなに非難や文句を言われようと、「絶対に計画を変えない」とした彼の信念によって成し遂げられたものであった<sup>(24)</sup>。

一方、佐藤が提案した通学生（後に別課生と改称）は、明治18年（1885）に募集が停止され、明治21年（1888）に廃止されるまで、卒業生は、本科生379名に対して通学生・別課生1,111名を数えた<sup>(25)</sup>。また、東京大学が唯一の「日本官立大学」<sup>(26)</sup>だったため、「医師開業試験規則」（明治12年2月24日付）により、そのいずれの課程を卒業しても無試験で医師開業免許が授与された。

こうして、東校において始まったドイツ医学教育と医師養成は、まもなくすると日本語授業と実地訓練を主とした洋方医促成主義による通学生制度と併存したのである。しかし、わが国の医学教育の方向は、ミュルレルが在職した3年間で定まり、明治12年からドイツ留学も始まり、その成果が着々と現れるようになったのである。

### 3. 医師開業免許の授与

医師養成に関連して、もう一つ課題があった。それは、近代医学に立脚した医師開業免許（医師免許と表記する）の授与である。

明治元年（1868）12月7日、政府は「医師之儀ハ人之性命ニ関係」するため、「今般医学所御取建ニ相成候ニ付テハ屹度規則ヲ相立、学之成否、術之工拙ヲ篤ト試考シ、免許有之候上ナラテハ其業ヲ行フ事不相成」<sup>(27)</sup>とし、医術開業試験を暗示した。そして、明治7年8月18日 文部省は東京、京都、大阪三府へ通達した「医制」の中で、医師が開業する場合、解剖学大意など6科目を試験科目として明示した（第37条）。

この方針は、同8年2月10日に内務省が出した「医制第三十七条ノ施行ニツキ三府へ達」、同年5月14日の「医制（改正）」、同9年1月12日付けの「医師開業試験ヲセシム」でも踏襲され、物理学、化学大意、解剖学大意などが明記された。

ところが、明治10年に東京大学が成立すると、「医学部試業及卒業証書規則」第2条に、本学は唯

一の官立大学であり、その医学部卒業生は「試業」や「大試業」に合格していることから無試験で医師を開業することを規定した。そして、同12年2月24日付けの「医師開業試験規則」では、それが特例として認められた<sup>(28)</sup>。

こうして、政府は、医学教育・医師養成と連動した医師免許授与においても、東京大学医学部をピラミッドの頂点に据えて展開したのである。

その後、明治16年10月23日の「医術開業試験規則」でも、物理学、化学、解剖学、生理学などを明記し、医師となる者は西洋医学を学科とした試験による方針は揺らぐことはなかった<sup>(29)</sup>。

一方、明治7年段階で、全国の医師数28,262名のうち23,015名（81.4%）は漢方医が占めていた現状<sup>(30)</sup>から、従来の医師との間の摩擦を避けるため漸進主義<sup>(31)</sup>も採らざるを得ず、「医制」第37条には「(当分) 従来開業ノ医師ハ學術ノ試業ヲ要セス」とした。そして、同10年には「維新以来該術ヲ以諸官庁及地方公立病院ニ奉職従事シ主トシテ医療若クハ教授ノ任ニ当リタル者ハ志願ニヨリ試験ヲ不須直ニ免状可交付候」（内務省達乙第76条）、同16年には「医師ノ乏キ地ニ於テハ府知事県令ノ具状ニヨリ内務卿ハ医術開業試験ヲ経サル者ト雖トモ…」(医師免許規則)とし、既得権を優先した恩典的な取扱いが明治39年（1906）の「医師法」まで続いた。

このように、政府は新たに医師開業試験を定めたが、特例として、東京大学医学部卒業生の無試験による免許授与や既得権を認めた免許授与を認めたのである。

### 4. 松江藩から島根県にかけての医学教育

わが国の医学教育制度が急展開する中、松江藩、島根県の動きは鈍かった。

松江藩では、文化3年（1806）、7代藩主松平治郷が京都から山本逸記を教授として招聘し、北堀に漢医学校存濟館を開設し、医学教育を開始した。これは全国的にみても早い動きであった。ここではカリキュラムを定め、中国医学の蘊奥を究めることを

めざした。そして、そのの医生には藩費による他国遊学の制度があり、藩主の側役1名、側医2名の立会いの下で定められた科目の試験を受け、合格した者だけに認められた。万一、在村在町の医師子弟が試験を受けずに他国へ遊学した場合には、存濟館への出入りを禁止されるだけでなく、医業の差し止めを命じられる場合もあった。

天保11年(1840)正月には、それまでの書院を学館、門長屋を書生寮と改め、存濟館を藩立の医学校として再編した。

こうして、存濟館は、医学教育機関として存在すると同時に、藩内の医業の管理・統制を行う行政機関としての権限も有していたのである。

ところが、明治3年、松江藩は、西洋医学が盛んになったことを理由に殿町へ藩立病院を創設し、院内に医学教授所を設け、この年、存濟館を廃止した<sup>(32)</sup>。

この発端は、西洋医を好んだ9代松平齊貴が隠居後の嘉永7年(1854)閏7月、御目見えしたばかりの錦織春象にわが子への種痘を命じ、安政6年(1859)頃再び藩内の子供へ無料で種痘接種を実施したことにより、痘瘡によるあばた面が減り、予防の効果を上げたからであった<sup>(33)</sup>。

この方針を引き継いだ10代松平定安は、文久2年に江戸藩邸へ西洋学校、翌年には松江へ洋学校を開校し、オランダ語、フランス語、英語の語学教育を推進した。慶応3年(1867)には藩校修道館へ西洋医学校を開設し、田代嚮平ほか1名が西洋医学世話役としてオランダ語の原書によって授業を開始した。そして、明治2年7月19日には横浜町へ仮病院を設置し、西洋医学を本格的に研究するようになった。さらに、明治3年頃から藩内各郡に南学郷校(皇漢学支校)とは別に西学郷校(医学支校)を設置し、すでに医師を開業している者をはじめその子弟にオランダ医学を教え、医師の再教育を始めた。この西学郷校は同5年1月の段階ですべての郡にできあがっており、松江藩の医学教育は、存濟館閉鎖からわずか2年ほどで一気にオランダ医学へと転換した。

ところが、同年4月30日、島根県は学制発布を前

にして、旧藩の学校をすべて閉校することを決定し、それまで西学郷校において行ってきたオランダ医学による医師養成を中止した。

その後、島根県は、医学に関して何も施策を打ち出せず、政府の方針に沿ってドイツ語による医学教育と医師養成を始めたのは、明治12年10月、東京大学医学部を卒業した医学士佐々木文蔚が乙種島根県医学校に着任するまで待たねばならなかったのである<sup>(34)</sup>。

## 5. 千原家について

ここからは、幕末に生まれ、明治以降に医師をめざした千原春甫を取り上げる。

### (1) 千原家における医業の始まり

千原家は「上久野村女良垣内分家」であり、屋号を「馬馳檜原」と称した。

その家系は、次の通りである。

#### 資料5 千原家の家系

元祖	千原伊兵衛信直(1667-1750年)
2代	千原利右衛門信孝(1694-1772年)
3代	千原道一(後秀齋。1724-1803年)
4代	千原文忠(1761-90年)
5代	千原齋民(後道恭。1761-1835年)
6代	千原秀介(号藍水。後秀齋。1794-1856年)
7代	千原秀齋(幼名秀介、1826-1902年)
8代	千原春甫(1858-1916年)
9代	千原寛(1881-1961年)
10代	千原正二(1913-72年)

(35)

千原家では、3代道一から9代寛まで約200年間にわたって連綿として医業を行っていた。この中で最初に医業を行った道一について、5代齋民が次のような「碑文」を残している。

#### 資料6 3代千原秀齋道一「碑文」

先生千原謙道一、字中如、壮年而志医遊学于京師、有年受業於後藤一督先生之門、歸郷術大行(次)  
 □、称登馬、後改秀齋、而子長女嫁西村氏、嫡男文仲早世、以村尾次男道恭<sup>(36)</sup>

ここで医学塾の門人帳を調べてみると、後藤良山

の「儒医姓名録」に「出雲 千原東馬」の記載がある<sup>(37)</sup>。「碑文」の「登馬」、門人録の「東馬」とも読み方は「とうま」であり、同一人物であろう。

ここには入門年は記載されていないが、彼の名前が「享保十五年」(1730)と「宝暦辛巳」(1761)の間にあること、彼が享保9年(1724)に生まれて享和3年(1803)に亡くなっていることから、彼は1750年頃、後藤家へ入門したと考えられる。

その時に学んだ「後藤一督」とは、初代養庵、2代椿庵に続く3代一亭(椿庵弟)と思われる<sup>(38)</sup>。

一方、「儒医姓名録」にはもう一人、「千原東馬」のあとに「雲州仁多郡 千原卯之丞 名至信」という人物が記載されている<sup>(39)</sup>。

この人物は、千原家の4代文忠または5代斎民とも考えられるが、兩人とも宝暦11年(1761)の生まれであり、該当しない。そのため、「千原卯之丞」という人物は、元祖千原伊兵衛信直の兄で、同じく分家して医業を行った屋号「高田岩畑」の千原家(元祖作右衛門。亀嵩在住)の一族<sup>(40)</sup>と考えられる。

卯之丞が後藤家へ入門した時期は記載されていないが、彼は、3代一亭の跡を継ぎ、「医理に深く通じた懇切な治療で知られ」、「門人の業を成す者四百余人に達し、家名を加盟再興」<sup>(41)</sup>した4代慕庵(椿庵子)に学んだと考えられる。

この慕庵には、仁多郡下布施村から大原郡大東町へ移った横山元風の弟元格も明和8年(1771)に入門しており<sup>(42)</sup>、藩内には空論を排した古医方を学ぶ傾向が強まっていた。

## (2) 千原春甫の父秀斎(7代)について

7代千原秀斎は自ら「増補史伝」を認め、次のように書いている。

### 資料7 「増補史伝」

氏名ハ徳、字ハ後僕天谷又蘭窓或ハ竹溪ト号ス。父ヲ村尾与兵衛信孝ト云ヒ、氏ハ其季子ナリ。文政九年二月四日ヲ以テ布勢村大字馬馳ニ生ル。幼名八郎、十四歳ノ秋、同村医師千原秀斎ノ養子トナリ、名ヲ啓介ト改メ、又暢達トモ云ヘリ。家業相続以来更ニ秀斎ト通称ス。天保十四年三月ヨリ飯石郡三刀屋駅横山宗甫ニ従ヒ経書歴史

ノ購読ヲ受ケ、弘化二年十二月ヨリ東京野崎学海ニ従ヒ漢学ヲ修メ、同三年豊後ニ遊ヒ廣瀬淡窓ノ門ニ入ル。此間氏ハ横山元湛及父ニ就テ医学ヲ修メ、同四年六月ヨリ松江藩医学館(注:存濟館のこと)ニ在ルコト六ケ月、教授山本安暢ニ従ヒ医学ヲ研キ、館則ニ依リ侍医並ニ幹事列席ノ上学力試験ヲ受ケ、医学研究ノ為メ上京ヲ免許セラレ、同年八月京都ニ出テ、小石元瑞、同苗仲蔵並ニ高階丹後之介ニ学ビ、嘉永元年四月帰郷。内外医術ヲ開業シ、資性兼直ニシテ恒ニ礼儀ヲ省リ、業務懇篤ニシテ奇効多端ナレハ、香林ノ英名日々ニ新ニシテ、殆ント濟<sup>[至孝]</sup>ノ道ニ適ヘリ。同二年二月横山氏ヲ娶リ、遂ニ六男五女ヲ生メリ。明治四年二月元松江県ニ任ヘ西学得業生仁多郡郷校引受申付ラル。県ノ廃止後仁多郡協同医学講習会ヲ設ケテ、数年間該会長ヲ勤ム。■八年四月同郡種痘所首長トナリ。■九年七月島根県第二十二区牛疫診断係トナリ。十七年四月内務省ヨリ更ニ改行免許状ヲ受ケ、同年十二月同県第十一部開業医師組合会々長ニ撰バレ、爾来現住地ニ斯業ヲ相続スト言。又曾テ公衆衛生費或ハ道路開修費或ハ赤十字社等ヘ金員ヲ寄附シ、爾他慈恵ノ義捐金彼是幾多ノ功ニ依リ木杯ノ下賜、或ハ賞状ヲ愛ク受クルコト数回ニ及ベリ。又若年ヨリ時々間ヲ愉ンテ花鳥風月ヲ弄詠意ヲ嗜ミ、今ヤ新旧雜篇ノ草稿枚挙ニ逞アラスト聞ヌ<sup>(43)</sup>

これにより、秀斎(啓介・暢達)の履歴をまとめると、次のようになる。

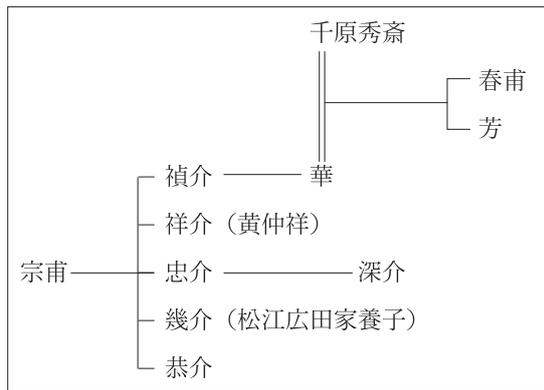
### 資料8 7代千原秀斎の履歴

- |            |                     |
|------------|---------------------|
| 1歳(1826年)  | 布勢村大字馬馳の村尾家に生まれる。   |
| 14歳(1839年) | 同村医師千原秀介(6代)の養子となる。 |
| 18歳(1843年) | 三刀屋の横山宗甫から経書・歴史を学ぶ。 |
| 20歳(1845年) | 江戸の野崎学海に漢学を学ぶ。      |

- 21歳（1846年）豊後の広瀬淡窓に学ぶ。その間、横山元湛と養父秀介に医学を学ぶ。
- 22歳（1847年）松江藩存濟館の教授山本安暢（3代）に学ぶ。そこの学力試験に合格し、上京して小石元瑞・仲蔵、高階丹後介に学ぶ。
- 23歳（1848年）京都から帰郷し、開業する。
- 46歳（1871年）西学得業生仁多郡郷校引受となる。
- 50歳（1875年）仁多郡種痘所首長となる。
- 77歳（1902年）没する。

広瀬淡窓の入門簿には「弘化三年丙午五月廿五日雲州仁多郡馬馳村千原啓介（注：7代秀斎） 千原秀斎（注：6代秀介） 歳二十一 井上良斎」とある。また、同日、「雲州飯石郡三刀屋町 横山恭介 横山元湛舎弟 歳十八 井上良斎」とも記載されている<sup>(44)</sup>。

資料9 横山家支家の系図



(45)

この横山恭介とは、横山家の支家横山宗甫の五男で、嘉永7年5月には伊東玄朴に蘭学を学んだ人物である<sup>(46)</sup>。

秀斎が22歳の時、松江藩存濟館で山本安暢（3代）に学んだ後、京都の小石仲蔵に学んだのは<sup>(47)</sup>、横山家本家の敬甫が先に山本安良（2代）に学び、上京して小石家に学んだ動きと同じであった。

また、高階丹後介は高階枳園の次男経支で、当時、宮中の「寮医師」を務めていた<sup>(48)</sup>。

帰国した秀斎はその後、存濟館から「仁多郡輔正」などを命じられ<sup>(49)</sup>、郡内のリーダーとして活躍した。松江藩は幕末から西洋医学導入に向けて動き出し、

明治になると松江藩内の各郡に西学郷校（医学支校）を設け、郡内の医師を対象として西洋医学を教え始めた。仁多郡でも三成町の善勝寺において、石原淳斎を「仁多郡医師世話役」、千原秀斎を「西学得業生仁多郡郷校引受」とし、『医範提綱』、『人身窮理』、『解剖訓蒙』、『理学提要』、『生理啓蒙』、『病学通論』などを用いて、郡内の医師に西洋医学を教えた<sup>(50)</sup>。

つまり、7代千原秀斎は、徹底的に漢学素養を身につけ、松江藩存濟館で学んだ後、京都の小石家、高階家に学んだのである。この背景には、3代道一が京都の後藤家で学んだ際、医師には高度な漢学素養が重要であり、それを身に付けた後、最新の医学を修得することが大切であることを代々家訓として伝えてきたからにちがいない。

一方、秀斎は嘉永2年、師である横山宗甫の孫娘で、横山禎介の長女である華を妻に迎え、長男春甫ら六男五女をもうけた。六男芳は大原郡木次町の錦織家を継ぎ、東京帝国大学医学部を卒業後、島根県立松江病院などに勤務した<sup>(51)</sup>。

こうして、千原家一族や姻戚である横山家はいち早く西洋医学に着目し、漢方に最新医学を取り入れながら地域医療を行っていたのである。

6. 千原春甫の事績

千原春甫の事績については、父秀斎が「孝慈南遊日誌」の中で詳細に記載しているので、これを基にして記述する。そのため、註には記載しない。



写真1 千原秀斎「孝慈南遊日誌 全」  
田中真生雄・光子氏所蔵。

### (1) 東京の私塾でのドイツ語修業

安政5年2月、千原秀斎の長男として生まれた春甫は、明治5年8月、15歳の時に東京へ出た。ちょうど太政官から学制が発布された時であった。この背景には、東校に在学中の横山深介(資料9参照。春甫の母と従弟)が夏季休暇のため帰省した折、東京の中島(横山)雲安からの勧めを聞いたからである。

この雲安とは、横山宗甫の次男祥介(号は石痴道人、黄玄祥、黄仲祥)である。彼は、風外禪師や貫名海屋に画を学び、山水画に優れていたが、その後、神門郡杵築の医家中島家の養子(18代。中島祥介)となった人物である。江戸や京都で画家として活躍し、万延元年(1860)にいったん帰郷した後、明治3年から再び上京し、東京に住んでいた<sup>(52)</sup>。そこで多くの人材と広く交流する中で、彼は、わが国のこれからの医学教育の動きを聞いていたと思われる。

明治5年4月30日以降、島根県では、すべての学校を閉鎖したままであったが、東校ではドイツ人による徹底した医学教育が始まっていた。そして、これから予科でもドイツ人教師による授業が充実していく頃であった。(資料4参照)

こうして、中島雲安や横山深介からわが国や東校での動きを聞いた千原家では、春甫がこのまま地元で止まっているはドイツ医学を修めることはできないことに気づいたと考えられる。

しかし、東校は今、改革の渦中にあり、そこをめざして春甫が行くことは先行きが不透明であり、また、そのためにドイツ語やドイツ学を独学で学ぶ春甫の苦労や家族の経済的負担などを考えると、容易には結論がだせなかった。そのため、千原家では横山家も交えて何度も相談したにちがいない。

その結果、オランダ医学を学んだ父秀斎の強い思いや西洋医をめざす春甫の覚悟を確認し、家族の協力を得ることも承諾され、春甫の東京行きが決まったと思われる。

春甫は深介と共に上京した。そして、早速、東校助教授の三崎嘯輔の私塾に入ってドイツ学、さらに独逸語学校に転入して「原人ヘルム」からドイツ語

を学んだ。

このヘルムとは、明治2年に来日し、和歌山藩で歩兵科教官の傍らドイツ語を教授し、明治5年からは横浜でドイツ語の私塾を開いていたアドルフ・ヘルム(Adolf Edward Theodor Helm)と考えられる。その後、ヘルムは本郷元町に在った進文社や独逸学教場でもドイツ語を教えた。さらに、時期は不明だが、東京外国語学校へ外国人教師として採用され、明治15年(1882)8月まで活躍した。

春甫は、独逸語学校でヘルムからドイツ語を学んだ後、開校したばかりの東京外国語学校へ入学し、明治7年3月には独逸語学下等第五級に在籍した<sup>(53)</sup>。

こうして、春甫が1年半にわたって独学でドイツ語を徹底的に学んだのは、何としても東校から改称された第一大学区医学校へ入学するためであった。当時の第一大学区医学校は、東校から引き続きミュルレルが尽力していた時期だったが、その前提となるドイツ語などの基礎学力の修得は、医学生個人に任せられていたのである。

### (2) 大学医業そして予科での修業

春甫は、明治7年11月、下谷に在った大学医業(東京医学校医学予備門)へ入学し、翌年、東京医学校予科へ入学した。その時の同窓生は250名であった。

予科は、「独逸語及羅甸語に最も重きを置」き、「当時の医学本科は既に専ら独逸医学を独逸人に依って教授せられたれば、予科に於て独逸語に最も重きを置けるは自然のこと」とされ、当初は2年の修学年限であった。その後「予期せる程の独逸語の素養ある者を得ること能はず」、「二ケ年にては到底年限不足」のため3年となった<sup>(54)</sup>。

春甫が予科に修学している時期(明治8年～)は、ミュルレルとの契約はすでに切れていたが、東京医学校にはドイツ人教師がもっとも多く在職し、ドイツ語による医学教育が充実していた。校内の日常会話はすべてドイツ語だったようで、当時、春甫がドイツ語で会話していたという言い伝えが、今でも千原家に残っている。

### (3) 東京大学医学部本科への入学

明治11年（1878）、春甫は、東京大学医学部本科へ入学した。当時の陣容は、「予科も本科も残らず先生は独逸人。極く初学の独逸語を教へる先生や、漢学の先生の外は残らず独逸人で、日本人は一人もない」状況であった<sup>(55)</sup>。

**資料10 東京大学医学部総理および教員（明治10年12月）**

- 総理 池田謙斎（東京）
- 総理心得 長与専斎（長崎）
- 外科 ウイルヘルム・シュルツ（ドイツ）
- 内科 エルウイン・ベルツ（ドイツ）
- 化学 アレキサンドル・ランガルト（ドイツ）
- 生理学 エルンスト・チーゲル（ドイツ）
- 解剖学 ハンス・ギールゲ（ドイツ）
- 物理学・数学 レヲポルド・シェンデル（ドイツ）
- ドイツ・ラテン語学 ルードルフ・ランゲ（ドイツ）
- 製薬学 ゲヲルグ・マルチン（ドイツ）
- ドイツ・ラテン語学 パウル・マエツト（ドイツ）
- 博物学 ヘルマン・アールブルグ（ドイツ）
- 製薬化学・算術 アスカル・コルシェルト（ドイツ）<sup>(56)</sup>

そして、医学一等本科には22名、二等25名、三等30名、四等36名、五等31名、一等予科には50名、二等65名、三等51名、予備一級59名、二級59名、三級63名、四級甲51名、乙52名の生徒が在学していた。先輩には、梅錦之丞（医学一等本科、松江出身）や森林太郎（鷗外、医学三等本科）、同級生には北里柴三郎（医学五等本科）らがいた<sup>(57)</sup>。

春甫と一緒に大学医齋へ入学した250名は、予科の入学時が115名、本科への入学時には31名と減少した。

しかし、東京大学医学部は熱気に溢れていた。

**資料11 千原春甫が東京大学医学部に入学した当時の様子**

方今医学益盛大ニ至リ、該部ニ於テ常ニ二千有余名ノ生徒ヲ教授セラルト雖トモ、正変ノ二則アリテ、正則修行ノ者ヲ曾テ本科生ト言ヒ、今改テ学生ト称セラレ、変則修行ノ者ヲ曾テ通学生ト唱ヒ、今改テ別課生ト呼ハル。而シテ其変

則学年ハ、満四年ニシテ卒業ノ成規タリ。生徒全数ノ内、正則ノ者ハ大凡十分ノ一ニ充タスト言。春甫預（予）科入学ノ際、一次ニ百十五名ノ入舎ト聞シカ、漸々減員シ、本科入学ノ際ニ至リテハ、只三十一名。

医学を学ぶ学生は2,000余名、このうち本科生は10分の1ほどであった。

春甫が本科で一緒になったのは、熊本からやって来た北里柴三郎をはじめ大久保真次郎、長崎医学校から来た山根文策、浦島堅吉ら、そして一ツ橋の東京外国語学校から一緒に来た河本重次郎、大谷周庵、池田陽一、鶴崎平三郎らであった<sup>(58)</sup>。彼らのそれまでの修学過程は各々異なっていたが、いずれも外国人教師から語学を学び、それに長けた者ばかりであった。

つまり、ドイツ語を修得した学生のみが本科へ入学し、ドイツ語で5年間授業を受けた。そして、別課生（通学生）は日本語により4年間授業を受けた。どちらも卒業すると無試験で免許が授与されたため、本科生は別課生を「パラジイテン（寄生虫）」、「インゼクト（昆虫）」と陰口をたたいた<sup>(59)</sup>。

ミュルレルは、着任当初、学生の質が悪いのに手を焼いたと回想した。しかし、5年後にやってきたベルツは「学生たちの素質はすこぶるよく」、「学生自身はよくドイツ語がわかる」と述べた<sup>(60)</sup>。これは、学生の資質やドイツ語能力が格段に向上したと同時に、厳格な試験などによって容赦なく退学させられたり、ミュルレルとの契約が終了した直後、東京医学校には2系統の教育課程が編成されたため、ドイツ語が苦手な生徒は本科から別課へ転科したからでもあった。

こうして、第一大学区医学校、東京医学校ではミュルレルの考えによりドイツ語による5年間の医学教育のみだったが、契約終了後は4年間の日本語による医学教育が行われるようになった。すると、前者の少数精鋭によるエリート教育より、後者による洋方医促成の方が盛況になったのである。

**（4）東京大学医学部開業式**

明治10年4月5日、それまで専門学校として存在

した東京開成学校と東京医学校が合併し、東京大学となった。また、東京開成学校へ進むべき生徒に対して予備教育を行ってきた東京英語学校は東京大学予備門と改称した。

こうして、医学部の体制がようやく整ったため、明治天皇の御親臨を仰ぎ、明治11年5月下旬に開業式を挙行する旨を願い出たが叶わなかった。翌年4月22日、明治天皇が初めて御臨幸されることになり、初めて開業式が挙行できた。会場には、本科生、予科生、別課生が参加した。

この時、ベルツは、「学校がもう授業を始めて二年半にもなるのに、やっと開校されるとはいささか奇異である。」<sup>(61)</sup>と述べ、東京大学医学部の改革の速度に比べ、その対応・整備が大きく遅れていたことを指摘した。

この時の医学部総理池田謙斎の祝詞は冒頭に示した通りだが、これに続いて、「御雇外国教授惣代」のウィルヘルム・シュルツが次のように演説した。

#### 資料12 シュルツの演説

本部ハ独逸語ヲ以テ少年生ヲ教授シ、邦語ヲ以テ晩年生ヲ教授スルノ所タリ。現ニ入校セル生徒ノ員数ハ一千四百有余人、内外教授、助教等合セテ三十有余名アリ。又総理ナル者アリ、校内一切ノ諸務ヲ担当セリ。而シテ正則卒業生ノ如キハ、欧州ニ至ルモ、直ニ専門科ニ入り得ヘキ学科ヲ躡ミ、変則生ノ如キハ、欧州開化ノ浅近ナル国、或ハ米国ノ一医学校ニ於テ教ヘツル科目ヨリモ稍高尚ナル学科ヲ教授セリ。

明治12年当時の東京大学医学部は、生徒が1400余名、内外の教授・助教が30余名であり、盛況であった。そして、正則（本科）生は「欧州」の「専門科」のレベル、変則（別課）生は「欧州開化ノ浅近ナル国」や「米国」の医学校で教える内容よりやや高い内容が教えられていた。

同年10月18日には第一回学位授与式が行われ、本科卒業生18名に学位が授与された。この中に、その後ドイツへ留学し、東京大学医学部眼科講師（ドイツに一時帰国したスクリバに代わって眼科の講義と診察を担当し、ミュルレルの構想を実現）となる梅

錦之丞や、乙種島根県医学校一等教諭となる佐々木文蔚らがいた。この場に立ち会ったベルツは、「本日、医学部の盛大な祝典。国家試験をおえたのち、十八名の学生が、八年という規定の全課程を修了した最初の卒業生として、学位免状を受け取るのである！かれ等は、わが国のドクトルに相当するという医学士の称号を得た。国家の真に必要なとす人材を育て上げたことは、われわれドイツ人の大いに満足するところである。」<sup>(62)</sup>と誇らしく感じた。

この言葉は、わが国へ招聘されたドイツ人教師が、並々ならぬ意欲をもって医学を教えていたことの証である。

#### (5) 東京大学医学部 医学・理科試問

春甫は、本科の4期を終えた明治13年（1880）9月下旬から「医学・理科試問」を受けた。

結果は、次の通りである。

#### 資料13 東京大学医学部医学・理科試問の及第証

東京大学医学部医学理科試問及第証

島根県平民 千原春甫 安政五年二月生  
右ハ明治十三年九月廿四日ヨリ廿七日迄施行セシ医学理科試問ヲ経テ左ノ成績ヲ得タリ

解剖学、生理学、化学、物理学

中 全成績

ドクトル、ランガルト

ドクトル、プロフェスソル、テイゲル

ドクトル、プロフェスソル、キールケ

ドクトル、シンテル

明治十三年十月

(印) (東京大学医学部之印)

明治8年11月に来日したランガルトは化学、明治9年に来日したテイゲルは生理学、明治10年に来日したキールケは解剖学、シンテルは物理学を教えていた。

これは「医学学生理科試業規則」にもあるように、「其担任ノ教授タル試業委員之ヲ施行」して成績を証明したもので、この「医学・理科試問」はすべてドイツ語で実施された。この時、この4科目のうち2科目が「下」であると、半年後、再び4科目の試問を受け、向上が認められない場合は再教育か退学

となるほど厳しいものであった<sup>(63)</sup>。

### (6) 卒業大試問

明治16年2月19日から始まった卒業大試問は、2ヶ月後の4月18日に終わった。

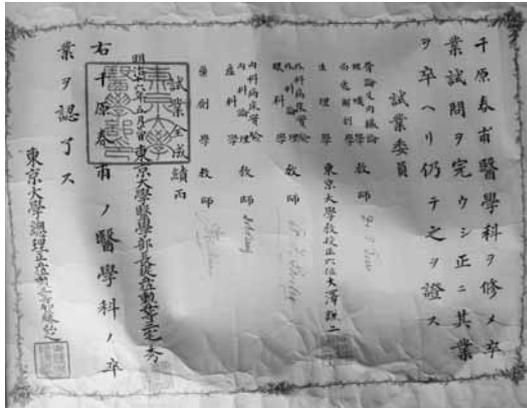


写真2 東京大学医学部卒業証  
(田中真生雄・光子氏所蔵)

春甫の「東京大学医学部卒業証」(第116号)には、骨論及内臓論、組織学、局所解剖学を担当したヨゼフ・ダッセ、生理学の大沢謙二、外科病床実見、外科論理、眼科学のジュリウス・スクリバ、薬剤学のイ・エフ・エイキマンらの試業委員が自らサインをしており、授業担当教師が卒業試問も担当していた。この日付は「明治十六年五月廿四日」であり、成績は「丙」であった。

同級生の卒業証をみると、その期日は北里柴三郎が4月21日、鶴崎平三郎が5月24日、川俣四男也が7月10日だったことから、卒業試問に合格した者から順に卒業証を授与されていた<sup>(64)</sup>。また、成績が「丁」、「戊」の者は再試験を受ける規則だったが、春甫は早い段階で8科目を合格していた。

こうして、春甫が15歳で東京へ出てドイツ語修業を始め、26歳で卒業大試問を終えるまでの12年間で、明治初期に東京大学医学部をめざした医学生医学修業だったのである。

### (7) 卒業生(医学士)の人事権

「東京大学医学部卒業証」を受け取った春甫の就職先は、当初、広島県への採用が内定していた。

ところが、東京大学総理加藤弘之と医学部長三宅秀から変更を伝えられ、徳島県が決定した。

これは、東京大学医学部の卒業生の人事権が、加藤弘之と三宅秀にあったことを示しており、「医学校通則」で示された公立医学校における医学教育推進、洋方医の養成には、この2人が重要な役割を果たしていたのである。

### (8) 徳島医学校、徳島病院への赴任

春甫は、明治16年6月27日、徳島県に向けて東京を出発した。この時の徳島医学校は、「准医学士」の三浦浩一が校長を務める乙種医学校であった。

三浦は東校正則で学び、明治9年(1876)、東京医学校最初の卒業生(25名)の一人である。翌年、東京医学校は東京大学医学部と改称され、「医学士」の学位が設けられたが、三浦らにはその学位は与えられず、明治15年2月の太政官布達第4号により「准医学士」と称することが許された<sup>(65)</sup>。

7月3日、春甫は、「徳島医学校一等教諭」、「徳島病院御用係兼務」を命ぜられた。また同日、春甫と東京大学医学部で同級生だった劉小一郎も「徳島医学校一等教諭」、「徳島病院御用係兼務」を命じられた。

これを受けて徳島県は、7月、文部省の認可を得て乙種徳島医学校から甲種に編入させた。春甫らの赴任が内定した段階で、徳島県は医学校の昇格を文部省に申請していたと思える早さである。

春甫が面会した三浦は「年齢三十五六ニシテ春甫ニ先キ達ツコト殆ント十年」、「天性温淳…校長ニシテ教諭ノ目ナシト雖トモ、生徒教育上ニ於テハ、春甫ト劉氏ノ中間ニ立テ臨機応変左右ヲ補助」する、とても優れた人物であった。

春甫は、毎朝8時に出勤した。

徳島病院は、「患者・入院・外来、合計大凡百数十名アリ、而シテ讃州ヨリ入院スル者、間々亦少カラス」と述べ、香川県からも患者がやっていた。そして、医学校と病院の勤務を終えると、「県令酒井氏ノ息女七歳」にドイツ語を教えたり、医学校生徒へ理学を教えたりして、帰宅後も忙しくしていた。そして、10月2日になって「甲種徳島県立医学校」の開校式が挙行された。

**資料14 徳島県医学校開校当時の様子**

徳島県立医学校ハ、本年七月巳ニ文部省ノ認可ヲ得テ甲種ニ編入セシカ、十月二日ヲ以テ更ニ開校式ヲ執行セリ。当日ハ同県大越大書記官始メ、各課長、郡吏、学校職員、県会議員及該校生徒等、皆其席ニ列シ、祝詞、演説等アリ。式畢ルノ後、該校職員ハ理化学試験ヲ為シ、衆覽ニ供シタリ。翌日、又諸器械等ヲ校内ニ陳列シ、衆庶ニ縦覧セシメシニ、參觀ノ男女五千百五十人アリシト、盛ナリ。

当日は大越亨大書記官らが出席し、理化学試験(注：実験だろう)や諸器械等の陳列なども実施され、四国で唯一の甲種医学校として、徳島県の医師養成への意気込みが感じられる。そして、諸器械等の縦覧には參觀者が5,150名もあり、県民も注目し、期待していたことがうかがわれる。

**(9) 東京大学学位授与式**

明治16年10月27日、東京大学において学位授与式が挙行された。ところが、春甫はすでに徳島医学校、徳島病院で勤務し、「遠県奉職」のため出席できなかった。

この年、学位を授与された者は、法学士8名、理学士22名、医学士26名、製薬学士1名、文学士10名、計67名であり、このうち医学士は次の面々であった。

**資料15 東京大学医学部第5期卒業生(医学士)**

兵庫県士族河本重二(次)郎	東京府平民大谷周庵
徳島県平民内田守一	東京府平民隅川宗雄
高知県士族斎藤為信	長崎県士族川原汎
栃木県士族磯舞	熊本県平民北里柴三郎
長野県士族池田陽一	愛媛県平民高橋盛寧
長野県士族浦島堅吉	山口県士族山根文策
大坂府士族中山専太郎	同士族緒方太郎
福井県士族木村孝蔵	同士族佐々木曠
東京府平民尾沢圭一	栃木県士族川俣四男也
東京府士族岩佐登弥太	長崎県士族霧崎三郎
島根県平民千原春甫	京都府平民劉小一郎
福島県士族南二郎	大坂府平民真部於菟也
三重県平民浅田決	福井県士族黒柳精一郎

彼らの就職先をみると、国や大学関係は、内務省の

北里柴三郎や東京大学の隅川宗男、高橋盛寧(後の島根県医学校)ら7名、公立医学校関係は福島県医学校の磯舞、岩手県医学校の中山専太郎、徳島県医学校の千原春甫・劉小一郎ら11名、公立病院関係は、新潟県病院の大谷周庵、福井県病院の内田守一ら8名であり、軍部への就職は一人もいなかった<sup>(66)</sup>。

**(10) 学位記**

明治16年5月に卒業した春甫に、「医学士」の学位が授与されたのは10月27日のことであった。

**資料16 千原春甫の医学士学位記**

学位記

千原春甫医学科ヲ修メ、定期ヲ歴テ、其業ヲ卒ヘ、考試咸完シ、乃予カ掌ル処ニ權ニ抛リ授クルニ医学士ノ位ヲ以テス。尔後優待令名ノ此位ニ属セル者ハ、永ク汝ノ享有ニ帰セン。因テ東京大学ノ印ヲ鈐シ、予ノ名ヲ署シテ、以テ之ヲ証ス。

明治十六年十月廿七日

東京大学総理正五位勲三等加藤弘之 印

(東京大学)

東京大学総理加藤弘之ノ申稟ヲ領シ証スルニ予ノ名ヲ以テス

文部卿正四位勲一等福岡孝弟 印

(文部卿福岡孝弟之印)<sup>(67)</sup>

この「医学士」の学位は、東京大学総理加藤弘之から文部省へ報告された後、文部卿福岡孝弟から認可されたため、卒業から5ヶ月ほど遅れた。

つまり、「医学士」の認定・授与は、大学ではなく文部省が行っていたのである。

**(11) 徳島医学校の職員**

開校当時の「甲種徳島県立医学校兼病院職員」は次の通りである。

**資料17 甲種徳島県立医学校兼病院職員**

校長兼院長	準医学士	三浦浩一
年俸1800円	[滋賀県士族]	
一等教諭兼病院御用係	医学士	千原春甫
年俸1440円	[島根県平民]	
但外科婦人科皮膚病引受		
一等教諭兼病院御用係	医学士	劉小一郎

年俸1440円〔京都府平民〕

但内科眼科引受

四等属衛生課長兼三等教諭 興津春機（年俸不明）

〔徳島県士族〕

三等教諭 神川庚蔵 年俸480円〔徳島県士族〕

三等教諭 馬島俊平 年俸420円〔徳島県平民〕

三等教諭 山ノ内弘達 年俸420円〔徳島県士族〕

一等助教諭 小室匡世 年俸300円〔徳島県士族〕

一等助教諭 製薬学士 田中鑄太郎

年俸300円〔静岡県士族〕

但薬局引受

書記 小出敬之 月俸10円〔徳島県士族〕

書記 多田 治 月俸8円〔徳島県士族〕

書記 田中克衛 月俸6円〔徳島県士族〕

この陣容を見ると、校長兼院長、一等教諭らは東京大学医学部の卒業生であり、その他の教諭・助教諭は、これまで地元の巽浜医学校（明治3年～）や徳島共立病院（明治5年～）で活躍した興津春機らであった<sup>(68)</sup>。

これをみると、当時の医師の養成・確保が東京大学医学部を中心として進められ、その卒業生を全国各地に配置し、地元の医師と協働させることによってドイツ医学の定着と医師の養成・確保を行おうとしていたことが明らかである。

これはまさに人間の心臓と血管の構造とよく似ているが、その血管を流れる血液は、この年わずか26名の医学士だったため、非常に細く、弱々しいシステムであった。

また、校長兼院長や一等教諭に県令並の高額の年俸を支払うことは、当時、ベルツが「わが国の財政状態は根底から悪化していた」<sup>(69)</sup>と述べたように、ちょうど松方正義の財政・金融政策による緊縮財政が地方財政を直撃しており、厳しい状況であった。

## (12) 千原春甫の辞職

春甫は、明治16年7月から乙種徳島医学校一等教諭として勤務し、乙種から甲種への昇格や病院の整備などに努力したが、翌年10月23日、突然辞職した。

わずか1年3ヶ月ほどの勤務であった。

この理由について、彼はまったく記録を残してい

ない。また、これまでの先行研究では「病痾」<sup>(70)</sup>と書かれているが、「孝慈南遊日誌」にはまったくその素振りがみられない。

ただ「孝慈南遊日誌」には同郷の医師小池氏の言葉を引用し、「大学卒業ノ医術ニ於ケル恰モ小学ニ似タリ…其學術既ニ高尚ナリト雖トモ、経験ノ中学日仍ホ浅フシテ、世態未タ分明ナラス」と書かれていることから、開業医としてこれから臨床経験を増やしたい思いが強かったと推測される。この考えは、北里柴三郎が「最高教育を受けたとはいへ、これだけの智識、又これだけの経験で、有らゆる疾病を診断し得るものであろうか」、「病院長を神様の如く思って集る患者に、自信のない治療や訳の分らむ処方を与へられようか」<sup>(71)</sup>と述べていることと共通している。

春甫は小さい時からみてきた父や横山家の医療行為を理想としており、当時、たびたび流行した感染症や伝染病をはじめ個々の患者が苦しむ病気に対して、医学士として、医師として、地域で直接患者に携わりたいという思いがあったと考えられる。

しかし、彼が勤務した徳島医学校と徳島病院は、医学教育と医師養成が中心だったため、午前中4時間が医学校での授業、午後が病院勤務であり、思う存分臨床経験を積むことができなかった。理論と臨床の統合を求めている彼にとって、辞職は苦渋の選択だったにちがいない。

その後、春甫は島根県に帰り、明治19年（1886）に開業した。これは、医学士としては非常に早い時期での開業であったが<sup>(72)</sup>、その後、こうした傾向は強まっていく。

なお、春甫の後任には、明治14年に東京大学医学部を卒業した医学士新宮涼亭が赴任した。彼は、卒業後、京都府医学校、甲種京都府医学校で勤務し、明治16年から福島医学校に勤務した<sup>(73)</sup>人物であった。

## (13) その後の甲種徳島医学校

明治16年10月に開校した甲種徳島医学校は、同19年4月に廃止となった。わずか2年半ほどの存続であった。これは政府が専門学校の医学校へ地方税をもって経費を支弁することを禁じる「勅令48号」(明

治20年9月30日)より1年半ほど前のことであった。

したがって、甲種徳島医学校の場合、「勅令48号」は廃校の直接の理由ではないが、やはり医学校存続のための県財政逼迫が原因ではなからうか。

## 7. ま と め

千原春甫の履歴をまとめると、次の通りである。

年譜をみると、春甫の青年期は、東校におけるドイツ医学カリキュラムの採用(明治4年9月)、東

京大学医学部開業式(明治12年4月)、医術開業試験規則制定(明治16年10月)とまさに重なっている。春甫が東京大学医学部本科へ入学し、医学理科試問や卒業大試問に合格できたのは、東京へ出て私塾や独逸語学校、東京外国語学校でドイツ人に就き、ドイツ語とドイツ学などを徹底的に学んだからに他ならない。

もし、明治2年に相良らがドイツ北部連邦公使プラントへ渡した依頼状通り、英語を話せるドイツ人

資料18 千原春甫の年譜(安政5年と明治5年のできごとは旧暦で表記する)

年号	西暦	歳	できごと
安政5年	1858	1	2月 千原秀齋の長男として誕生する。
明治5年	1872	15	8月 東京へ上京する。その後、私塾や独逸語学校でドイツ語やドイツ学を学ぶ。
明治7年	1874	17	3月 東京外国語学校独逸語学下等第5級に在籍する。 11月 大学医齋へ入る。入学生250名。
明治8年	1875	18	予科へ入る。入学生115名。
明治11年	1878	21	本科へ入る。入学生31名。
明治12年	1879	22	4月24日 東京大学医学部開業式に参加する。
明治13年	1880	23	9月24~27日 医学理科試問を受ける。 10月 医学理科試問が及第する(成績「中」、第4期修了)。
明治15年	1882	25	11月 医学全科の授業が修了した者30名は、来春に行われる卒業大試問の準備に入る。
明治16年	1883	26	2月19日 卒業大試問が始まる。 4月18日 卒業大試問が終わる。全科「及第」を告げられる。 5月24日 東京大学医学部長従五位勲五等三宅秀、東京大学総理正五位勲三等加藤弘之より医学科の卒業試問が終えた証書を授与される。成績は「丙」。医学部卒業生26名。 卒業後は広島県への奉職が内定していたが、徳島県へ変更となる。 6月27日 徳島に向けて東京を出発する。(6月30日 徳島県到着) 7月3日 徳島県より「徳島医学校一等教諭」、「徳島病院御用係兼務」を命ぜられる。「年俸金千四百四拾円」が決定する。(7月 徳島医学校は乙種から甲種への編入が文部省から認可) 10月2日 「甲種徳島医学校」の開校式が挙行される。 10月3日 甲種徳島医学校の諸器械等が縦覧され、5,150名の参観がある。 10月22日 徳島県より「授業係」を命ぜられる。 10月27日 東京大学総理正五位勲三等加藤弘之、文部卿正四位勲一等福岡孝弟より「医学士」の学位を授与される。 11月12日 徳島県より「医術開業試験委員」を命ぜられる。
明治17年	1884	27	2月1日 内務卿正四位勲一等山縣有朋より「内外科医術開業免許」を授与される。 5月1日 衛生局長長与専齋から「医術開業免状」を勘査して医籍第5,105号に登録される。 10月23日 徳島県より「徳島医学校一等教諭」、「徳島病院御用係」を依願差免される。(後任は新宮涼亭)
明治19年	1886	29	島根県神門郡大津町で開業する。
明治31年	1898	41	島根県仁多郡布勢村で開業する。
大正5年	1916	59	11月5日 没する。

医師教師が着任していたならば<sup>(75)</sup>、春甫の行動は違っていたにちがいない。

つまり、明治初期の少数精鋭主義による医師養成は、学校としての制度が混沌としている段階において、ミュルレルがいくつもの系統的な準備教育を経ないまま、高度なドイツ医学教育を導入して始まったものである。そして、そこで必要なドイツ語や自然科学の知識などの修得は個人に任せていたため、医学生は、東校（後の東京大学医学部）入学までにそれを独学で学ばねばならなかったのである。

## 8. おわりに

今回、明治初期の医学界における揺籃期に、地方から医師をめざした千原春甫を取り上げた。

幼少の頃から漢学を学んだもののオランダ語やドイツ語の素養がなかった彼にとって、個々の患者の病状に応じて漢方と西洋医学を織り交ぜながら治療する父や叔父（横山家）のような「良医」になることは夢であった。そのためには、どうしても東校へ入学し、そこで「真の医学」を修得する必要があった。

その後、春甫は15歳から26歳までの12年間、東京で学び続けたが、それは結果的にミュルレルが来日直後に構想した予科7年、本科5年とまったく同じ期間であった。これは、本人の努力はもちろんだが、家族をはじめ一族の経済的・精神的支えなどがあって初めて成し遂げられたものであった。

このように、わが国の医学が一気に高度な医学水準までに発展したのは、お雇い外国人や医学界のリーダーらの決断力・指導力はもちろんだが、医学生の飽くなき学びへの渴望と血のにじむような弛まぬ努力、またそれを支えた家族らの力強い支援によって成し遂げることができたのである。

今後、政府の方針をさらに細かく分析するとともに、甲乙種医学校の具体的事例として徳島医学校や島根医学校などを通して、明治前期における医学教育改革過程とその意義などを検討していきたいと考えている。

## 【註】

- (1) 千原秀斎「孝慈南遊雑記」田中真生雄・光子氏所蔵。
- (2) 上野益三『お雇い外国人』3,p.13,鹿島研究所,1968.
- (3) 宗田一「明治新政府の医学教育事始」下,p.3、『古医学月報』1976.  
上掲『お雇い外国人』3,p.14.
- (4) 千原春甫について触れられている次の文献には誤りがあるため、利用する場合には注意が必要である。  
神河庚蔵編『阿波国最近文明史料』臨川書店,1973.  
福島義一『阿波の医学史』徳島県教育会出版部,1970.  
徳島大学医学部五十年史編集委員会編『徳島大学医学部五十年史』徳島大学医学部医学科同窓会青藍会・徳島大学医学部栄養学科同窓会,1993.  
仁多町誌編纂委員会編『仁多町誌』仁多町,1996.  
山陰中央新報社編『島根県歴史人物事典』山陰中央新報社,1997.  
大和武生監修、徳島市史編さん室編『徳島市史』第5巻,徳島市教育委員会,2003.
- (5) 厚生省医務局編『医制百年史』p.3-6,ぎょうせい,1976.  
同編『同』資料編p.19-20,ぎょうせい,1976.  
東京帝国大学編『東京帝国大学五十年史』上冊,p.357,東京帝国大学,1932.  
宗田一「明治新政府の医学教育事始」中,p.1、『古医学月報』p.1,財団法人古医学資料センター,1976.
- (6) 宗田一「明治新政府の医学教育事始」上,p.7、『古医学月報』財団法人古医学資料センター,1976.
- (7) 上掲「明治新政府の医学教育事始」下,p.2.
- (8) 上掲『東京帝国大学五十年史』上冊,p.374.
- (9) 石橋長英・小川鼎三『お雇い外国人』9,p.13-5,鹿島出版社,1979.
- (10) 上掲『東京帝国大学五十年史』上冊,p.354-457.  
なお、その後も名称変更があり、再び東京大学医学部（第二次）となったのは昭和22年（1947）のことである。
- (11) 酒井豊「兵部省軍医寮設置と大学東校」p.1-11,『東京大学文書館紀要』第5号,1986.
- (12) 上掲『医制百年史』資料編,p.25-7.
- (13) 上掲『お雇い外国人』9,p.17-27.
- (14) 入沢達吉「レオポルド・ミュルレル」中外医事新報第1200号、p.403-13,1933.
- (15) レオポルド・ミュルレル著、石橋長英・小川鼎三・今井正訳『東京一医学』p.17-8,学術社,2009.
- (16) 上掲『東京一医学』p.15-7.
- (17) 上掲「レオポルド・ミュルレル」p.409-12.
- (18) 上掲『東京一医学』p.45.
- (19) 上掲『東京一医学』p.50.
- (20) 上掲『東京一医学』p.41.
- (21) 上掲『東京帝国大学五十年史』上冊,p.360-70.
- (22) 上掲『お雇い外国人』9,p.22-3.  
上掲『東京帝国大学五十年史』上冊,p.751.

- (23) 上掲『東京一医学』p.10-82.  
吉良枝郎『明治期におけるドイツ医学の受容と普及—  
東京大学医学部史』p.18-70,築地書館,2010.  
上掲『東京帝国大学五十年史』上冊,p.383-441.  
面谷明俊『新暦・旧暦対照表』(2010)により新暦  
を旧暦に変更した。
- (24) 上掲『東京一医学』p.33-4.
- (25) 猪飼周平「明治期日本における開業医集団の成立」  
p.41,『大原社会問題研究所雑誌』No.511,2001.
- (26) 明治12年「医師試験規則」。
- (27) 上掲『東京帝国大学五十年史』上冊,p.357.
- (28) 上掲『東京帝国大学五十年史』上冊,p.801-2.
- (29) 上掲『医制百年史』資料編,p.36-58.
- (30) 厚生省医務局『衛生統計からみた医制百年の歩み』  
医制百年史付録、p.45,ぎょうせい,1976.
- (31) 上掲『医制百年史』p.31.
- (32) 文部省編『日本教育史資料』二,p.484-5,富山房,1903.
- (33) 松平家文書「列士録」錦織春象の項、島根県立図書  
館所蔵。  
八束郡医師会史編纂委員会編『八束郡医師会史』p.  
27-9,八束郡医師会,1988.
- (34) 梶谷光弘『松江藩校の変遷と役割』  
p.60-64,p.90-96,松江市教育委員会,2010.  
田野俊平・梶谷光弘『西洋医学受容から衛生思想普  
及までの道のり』p.73-80,松江市歴史まちづくり部資  
料編纂課,2020.
- (35) (36) 糸原英文編「上久野村女垣内分家馬馳村檜原  
千原家過去帳」田中真生雄・光子氏所蔵。
- (37) 長野仁「後藤良山門人録『儒医姓名録』」長野仁氏  
提供。
- (38) 京都府医師会編『京都の医学史』p.450,p.511-20,思  
文閣,1980.
- (39) 上掲「後藤良山門人録『儒医姓名録』」。
- (40) 上掲「上久野村女垣内分家馬馳村檜原 千原家過去  
帳」。
- (41) 市古貞次他編『国書人名辞典』第二巻,p.267,岩波書  
店,1995.
- (42) 飯石郡役所編『飯石郡誌』p.723,名著出版,1972.
- (43) 千原秀斎「増補史伝」田中真生雄・光子氏所蔵。
- (44) 梶谷光弘「松江藩医学史において松平治郷(不昧)  
が果たした役割について」p.86,『古代文化研究』第12  
号,2004.
- (45) 上掲『飯石郡誌』p.725-6.
- (46) 上掲『飯石郡誌』p.726.  
上掲「松江藩医学史において松平治郷(不昧)が果  
たした役割について」p.83.
- (47) 上掲『飯石郡誌』p.723.
- (48) 上掲『京都の医学史』p.1315-7.
- (49) 「存濟館御用留扣」巻六,島根県立図書館所蔵。
- (50) 米田正治『島根県医学史覚書』p.37-8,報光社,1976.
- (51) 仁多町誌編纂委員会編『仁多町誌』p.998-9,仁多町,  
1996.
- (52) 米田正治『島根県医家列伝続』p.159-63,報光社,1978.
- (53) 東京外国語学校編『東京外国語学校沿革』p.54,p.74,  
東京外国語学校,1932.  
東京外国語大学百年誌編纂委員会編『東京外国語大  
学沿革略史』p.2,東京外国語大学百年誌編纂委員会,  
1997.  
重久篤太郎『お雇い外国人』14,p.184-6,鹿島出版会,  
1976.
- (54) 上掲『東京帝国大学五十年史』上冊,p.750,p.804-5.
- (55) 入沢達吉「明治十年以後の東大医学部回顧談」p.285,  
『雲荘随筆』国会図書館デジタル。
- (56) 上掲「明治十年以後の東大医学部回顧談」p.281-2.
- (57) 上掲「明治十年以後の東大医学部回顧談」p.285-7.
- (58) 宮島幹之助編『北里柴三郎伝』p.19-22、北里研究  
所,1932。  
なお、鶴崎平三郎は、長崎医学校から東京外国語学  
校を経て東京大学医学部へ入学している。(川俣昭男  
「明治初期東京大学医学生活の学生生活(その二)」p.5,  
東京大学史史料室編「東京大学史紀要」第28号,2010.)
- (59) 上掲『日本の医療史』p.426。  
上掲「明治十年以後の東大医学部回顧談」p.289-90.
- (60) 菅沼竜太郎訳著『ベルツの日記』上,p.43,岩波書店,  
1992.
- (61) 上掲『ベルツの日記』上,p.79.
- (62) 上掲『ベルツの日記』上,p.94.
- (63) 上掲『東京帝国大学五十年史』上冊,p.768,p.836.
- (64) 川俣昭男「明治初期東京大学医学生川俣四男也一そ  
の学生生活を中心に」p.10-8,東京大学史史料室編「東  
京大学史紀要」第23号,2005.
- (65) 上掲『東京帝国大学五十年史』上冊,p.432-3.
- (66) 「東京大学医学部一覽」明治16年,p.246-8,医学図書  
館デジタル資料室。  
同級生に関する著書、論文、紹介としては、次のもの  
がある。  
宮島幹之助編『北里柴三郎伝』北里研究所,1932.  
大谷彬亮『医者大谷周庵』大谷彬亮,1935.  
川本重次郎『回顧録』東京帝国大学医学部眼科教室  
内川本先生喜寿祝賀会事務所,1936.  
東京大学医学部附属病院「東大病院だより」No.60,  
東京大学医学部附属病院,2020.  
上掲「明治初期東京大学医学生川俣四男也一その学  
生生活を中心に」。
- (67) 「学位記」田中真生雄・光子氏所蔵。
- (68) 大和武生監修、徳島市史編さん室編『徳島市史』第  
5巻,p.390-3,徳島市教育委員会,2003.
- (69) 上掲『ベルツの日記』上,p.116.
- (70) 仁多郡役所『島根縣仁多郡誌 全』p.571,名著出版,  
1972.

- (71) 上掲『北里柴三郎伝』p.25.  
 (72) 小関恒雄「明治初期東京大学医学部卒業生動静一覧」  
 (1)・(2) 『日本医学雑誌』33巻3号・36巻3号、  
 1987・1990.  
 (73) 上掲「東京大学医学部一覧」明治16年。  
 京都府立医科大学創立八十周年記念事業委員会編  
 『京都府立医科大学八十年史』p.214,京都府立医科大学  
 創立八十周年記念事業委員会,1955.  
 (74) 「孝慈南遊日誌」、田中真生雄氏資料、上掲『東京  
 外国語学校沿革』p.58-77により作成。  
 (75) 上掲『東京帝国大学五十年史』上冊,p.375.

謝辞：本稿を執筆するにあたり、鎌倉市在住の田中真生雄・光子氏には資料の閲覧・写真撮影等において大変お世話になりました。紙面をかりて御礼を申し上げます。

本稿は、「平成29年度島根県中・近世史研究会」、「平成30年度日本医史学会学術総会」において発表した内容を加筆・修正したものである。

補遺

入稿後、田中真生雄・光子氏より「千原家から新しい資料が発見された」との連絡があった。その中の一つに、千原春甫自筆の「徳島県奉職明細記」(小本)があった。

明治16年に東京大学医学部を卒業した医学士の貴重な資料であるため、その全文を紹介する。(原文は縦書き・旧字体)

[表紙] 徳島県奉職明細記

[本文] 徳島県奉職明細記

島根県出雲国仁多郡馬馳村

千原秀斎長男

平民 千原春甫

予明治五年九月小謂陽横山深介君ニ從テ東京ニ遊ビ、同年十一月ヨリ明治六年一月マデ三崎嘯先生ニ就テ独逸文ノ読法ヲ学ヒ、同二月東京本郷元町一丁目進文学社ニ入り、独逸人「ヘルム」氏ニ就テ独逸ノ文法ヲ学ヒ、短文ヲ作り且ッ本人ノ言語ヲ会得スルニ至レリ。同九月東京外国語学校仮入学中、不幸ニシテ脚気症ニ罹リ退学ス。明治七年十一月本症全治スルヲ以テ東京大学医学部文リ本部御雇独逸人ドクトルホルツ、ドクトルフンク、ドクトルランゲ三氏ニ就テ独逸、羅甸ノ語学、ドクトルセンデル氏ニ就テ数学、ドクトルセルゲンドルフ、ドクトルアールブルグ両氏ニ就テ博物学ヲ修メ、明治十年十一月(平)預科ヲ卒ヘリ。同十二月ヨリドクトルランガルト氏ニ就テ化学及ヒ薬物学、ドクトルセンデル氏ニ就テ物理学、ドクトルギールケ氏ニ就テ系統解剖学及ヒ比較解剖学、ドクトルヂセス氏ニ就テ局処解(解)部学、ドクトルアールブルク氏ニ就テ薬用動植物学、ドクトルチーゲル氏ニ就テ生理学及ヒ病学通論、ドク

トルシルチェ氏ニ就テ外科及ヒ眼科学、ドクトルベルツ氏ニ就テ内科産科婦人科学(阿蘭陀人エイキマン氏奉職中ナレトモ)東京大学助教授下山順一郎氏ニ就テ分析学ヲ修メ、明治十五年十月三十一日(皇)受業ヲ卒ヘ、同十六年四月十七日本部学生卒業試問規則ニ掲載セル各条目ニ及第セリ。

尔来東京大学総理加藤弘之君及ヒ本学医学部長三宅秀君之媒介ニ由テ徳島県ニ奉職ヲ約ス。明治十六年五月、左ノ履歷書ヲ呈ス。

履歷

島根県出雲国仁多郡馬馳村千原秀斎長男

平民 千原春甫

安政五年二月四日生

東京本郷区本郷真砂町三拾一番地 佐藤久敬方同居。千原家世々医ヲ業トス。春甫幼クシテ皇漢普通ノ学ヲ家父ニ受ケ、傍ラ和漢ノ医書ヲ読ミ、且診察処方ヲ傍觀シ、又調薬ニ従事ス。

明治五年九月、父命ヲ得テ東京ニ遊ヒ、和独ノ諸氏ニ就テ独逸語ヲ学ブ。

明治七年十一月東京大学医学部ニ入り(平)預科本科語学科ノ教授ヲ受ケ、本年四月十七日、本部学生卒業試問規則ニ掲クル各科目ノ試問ニ及第セリ。

明治十六年五月

明治十六年五月二十三日、東京ヨリ徳島県マデー一日十里結十九日間ノ旅費金二拾八円五拾錢、東京大学医学部ニ於テ受取ル。

六月六日来ル七月分月給金二百二拾円、医学部会計課ニ於テ受取ル。

六月二十一日、福田敬業、加藤弘之、多納光儀、北尾漸一郎、樫村清徳、長与専斎ノ諸君、二十二日永井揮祥、桐原真節、安本徳寛、二十三日三宅秀君ニ暇ヲ乞フ、且医学部ニ於テ加藤弘之君ノ添書ヲ得タリ。

二十六日、佐藤久敬宅ニ於テ同人夫婦令女二名、平岡内室、片山吉則、江沼元五郎、中島某ト別盃ヲクム。二十七日同家出立、午前九時四十五分ノ汽車ニテ横浜ニ至ル。同正十二時玄海丸ニ乗止シ、同六時同港ヲ出帆シ、二十九日午前四時神戸港ニ到着ス。是ヨリ大坂ヲ経テ西京ニ至リ、劉小一郎子ト共ニ夕方大坂ニ帰り、同夜十二時出帆、朝陽丸ニテ三十日朝十時徳島県下第一大学区一小区中通町三百四番地、商中野正治郎方着、且同居ス。而シテ三浦氏ニ面会ス。

七月一日、徳島県令酒井明閣下ニ自宅ニ於テ面謁シ、而シテ加藤氏ノ添書ヲ呈ス。二日初メテ徳島県立病院ヲ訪フテ着届ヲス。当日、卒業生十二名ニ卒業証書授与式アリ。■掲ス。夕景日ノ外ニ於テ院長及助手、衛生課長、学務課長、警部長ト祝宴ヲ開ク。

七月三日

千原春甫

1 任徳島県医学校一等教諭  
 徳島県大書記官従六位 大越享奉(ママ)

明治十六年七月三日

徳島医学校一等教諭

千原春甫

2 年俸金千四百四拾円支給候事

明治十六年七月三日

徳島県

徳島医学校一等教諭

千原春甫

3 徳島病院御用係兼務申付候事

明治十六年七月三日

徳島県

徳島医学校一等教諭

千原春甫

4 授業係申付候事

明治十六年十月廿二日

徳島県

徳島医学校一等教諭兼徳島病院御用係

千原春甫

5 医術開業試験委員申付候事

明治十六年十一月十二日

徳島県

明治十六年九月 大日本私立衛生会員トナル

同十二月廿八日 大日本山林会特別会員トナル

(以下白紙)

本稿では父千原秀斎が書いた「孝慈南游日誌」を取りあげて論じたが、今回発見された春甫自筆の「徳島県奉職明細記」と比べると、内容に微妙な違いが見られる。詳細については、後日考察したい。